1984. 6. 3

義太夫

義太夫協会々報
第３１号
昭和59年６月３日
社団法人　義太夫協会発行
〒104　東京都中央区銀座
6—18—2 新橋演舞場Ｂ２
TEL　（541）5471

庶民の生活に生きていた義太夫節

義太夫協会会長　吉川英史

暗がりに　御痛わしやが　行当り

という川柳がある。

元禄十四年（一七〇一）竹本義太夫が筑後掾を受領し、その祝賀記念に演じたのが「蟬丸」で、その中に「御痛わしや蟬丸は、何のむくひか浮世のやみ、恋慕の闇のくらがりに」という文句がある。（「蟬丸逢坂山入り道行」）。この「蟬丸」が大当たり、大評判で、八百屋の熊さん、魚屋の八っつぁんも、口真似で「オンイタワシヤ、セミマルハ」というなりながら歩くので、ぶつかるほどだというのが、右の川柳である。

いかに当時義太夫節が民衆の心の中に生きていたかが、よくわかる。それほどではなくとも、庶民の義太夫節愛好熱は、江戸時代を通じてさめなかったことが、義太夫節の文句が日常語の中に、たくさん入っていたことでもわかる。「そりゃ聞こえませぬ伝兵衛さん」という「堀川猿回しの段」の文句は、相手に抗議する時の日常語としてよく使われたし、また、「三勝半七酒屋の段」で、半兵衛が息子半七のことを知っていて、知らぬ顔をするので、「知らぬ顔の半兵衛」などという日常語ができた。明治初期にできた「壺坂」の「たとえ火の中、水の底」という文句は、今でもたまに男女間で、愛情の誓いとして使われることがあるようである。

一昨年九十五歳で亡くなった養母から、「あの娘さんの鼻、文楽やなァ」という言葉を聞いたことがある。大坂で昔の人がいった言葉だそうだが、文楽には歌舞伎と違って花道がない。花道と鼻道を掛けた言葉で、鼻が低く、鼻すじが通っていないことを、「文楽」という暗号で表わしたのだそうだ。

私が学校の講義にも使い、試験にも出した川柳の一つに、こんなのがある。——

三の切　しゃあ　しゃあとして　姑見る

これは義太夫浄瑠璃の戯曲構成がわかっていないと、意味がわからない川柳である。義太夫浄瑠璃には、世話物もあるが、時代物が本格的と考えられていた。その時代物の構成は、原則として五段組織であり、各段が口・中・切の三部分に分かれている。「三の切」とは、「三段目の切」の略である。

ところで、義太夫浄瑠璃の戯曲の作り方は、登場人物を善人と悪人に分け、その悲劇的葛藤が最後にめでたし、めでたしで終るようになっている。それを各段に当てはめると、第一段は事件の発端、第二段では悪人が善人をいじめ始める。第三段ではいよいよ善人が苦しみ、第三段の切では、悲劇の最高潮に達し、殺されたり、切腹したりする。第四段では局面に変化が生じ、善人が立ち直る。第五段では、悪人が亡んで善人が栄え、めでたし、めでたしで終るのである。

（２頁下段へ）

ごあいさつ

義太夫節保存会会長
豊澤仙広

全国的に梅雨に入る頃となりましたが、皆々様には益々お健やかにお過しのこととお喜び申し上げます。私、舞台を引退して早や一年近くたちましたが、本牧亭公演は一度もかかした事なく、若人の上達ぶりを聞いて私事以上にうれしく、生き甲斐を感じて毎日を幸福に暮しているこの頃でございます。

義太夫の本場である大阪に、やっと国立文楽劇場が出来ました。文楽はもとより、義太夫節にたずさわる玄素の方々が盛んになり、義太夫を愛好し理解して下さるお客様がお一人でも多くなることを祈る次第です。

本牧亭のお客様もすっかり若返って、益々賑やかになり、私はいつも手を合わせて御礼申し上げております。毎月二十日、二十一日、また若人の勉強会には、一人でも多くお誘い下され、義太夫公演を御後援下さるよう、伏してお願い申し上げる次第でございます。

昭和五十九年六月

義太夫節三百年に因み

河野国声氏より三百万円御寄附

去る四月四日、常任相談役・河野国声氏宅にて、三百年前の地蔵尊を祀る花祭が催され、豊澤仙廣前副会長をはじめ、竹本土佐廣名誉会員、鶴澤重造監事、竹本朝重・竹本駒之助両副会長、竹本綾太夫事務局長らが招待をうけました。今年は、義太夫節の祖・竹本義太夫が、大阪道頓堀に竹本座の櫓を挙げて三百年にあたり、奇しくもその地蔵尊と同年であるということで、花祭の席上、水野事務局員に三百万円が手渡されたものです。

義太夫協会では、初代竹本義太夫の祥月命日、9月15日以降に、義太夫節三百年を記念する行事をいくつか計画していますので、今回の御寄附は誠に有難く、厚く御礼申し上げる次第です。

（1頁より）

このように、第三段の切（三の切）は悲劇の絶頂であるのに、これを涙も流さず、しゃあ しゃあとして見ていられる姑は、なんという無情な、冷酷な人間なんだろう!! これが、川柳の「三の切 しゃあしゃあとして姑見る」の意味なのである。つまり、姑にいじめられる嫁の立場から、姑の冷酷さを表現するのに、義太夫浄瑠璃の戯曲構成法、劇作法のきまりを利用したのである。

ということは、この川柳の作者が、義太夫浄瑠璃の構成法を知っているのはもちろんであるが、一般の人がこれを知っていると思えばこそ、このような川柳が作られるのである。それほど昔の庶民生活に義太夫節は浸透していたのである。義太夫節三百年に当たり、もう一度庶民生活の中に義太夫浄瑠璃を生かしたいものだと思う。

念願のコピー 遂に設置

―河野国声氏御寄贈―

四月はじめ、縮少もできる最新機種のコピーを、河野国声氏より御寄贈いただきました。中古でもいいからと思っていた事務局は、時間も経費も大幅に節約でき、毎日大変重宝しております。

会員の皆様も、どうぞ御利用下さい。

（B4版 一枚 10円）

義太夫人生・六十六年

常任相談役　河野国声

私の人生に義太夫というものが生れて以来六十六年、今日まで続いているというのは、私の名前が河野義、義太夫の義の字、義太夫に縁があったということでしょうか。

義太夫の魅力は、腹の底から頭のテッペンまで、体全体を使う日本の国宝芸術、音曲の司といわれる程、芸術的に深い奥行にあります。その魅力で、私なぞは最初のうちは良い気持で語って歩いたこともありますけれども最近だんだん年をとって、色々なことが判ってくると却って真剣になって、一週間に一度位、仙広師のお宅にお稽古に参ります。お稽古も床に上る時も、全身全霊の一本勝負です。一段まるごかし、床に上ることは一年に五、六度しかありませんが、その一回はお稽古十回にも相当するほど気合が入ります。今は録音テープというものがありますから記録は残りますけれども、訂正も言い訳もきかないという真剣な一本勝負、なかなか厳しいものであります。

去る四月四日、義太夫の三百年を記念してという義太夫協会に対して、いささかの献金をいたしました。事務所のすみやかな連絡で、竹本土佐広国宝、豊澤仙広、鶴澤重造、竹本朝重・駒之助両副会長、竹本綾太夫事務局長等の方々が、義太夫節と同年輩の地蔵さんの三百年祭に御参加下さり、思いもかけぬ義太夫三百年祭ともなりました。その席で「山城清六さんがまだ生きていてお稽古して下さる、何と便利な録音テープ稽古法ではございませんか」と述べた時に、土佐広国宝は「それは先生だから出来るんですよ。ふつうの人にはそんなに器用にはいきませんよ」と申されました。けれども、一日に二時間三時間かけてお稽古に行くつもりでテープを三時間きけば、丸ごかし一段が三回もきけるのですから、日本一の芸術を腹の底まで入れておける、太棹の音、何という素晴しい魅力でしょうか。録音テープで稽古が出来ないというのは、熱心さが足りないのだと、私は思います。

義太夫稽古の思い出話をひとつふたつ。安藤どくろさんの縁で、名人七代目吉兵衛師も東京に毎月十日余りづつ出稽古にみえたのであります。私は、吉兵衛師の所に行くときは冬の寒い日も着物を着かえて、書生のはくような袴をはいて、浴衣ひとつで見台の前にむかう、師匠も従って非常に熱心、忠実に教えてくれる――ある日のことでありました。午前九時にお稽古始めて十一時半になってもまだひと節ひと節、ひと言ひと言注意をして教えてくれるので、お稽古本二冊も三冊も、真っ黒になる程、教えられたことを鉛筆で欄外に書いておきました。もちろん素人であっても座ブトンなどは敷きません。タタミの上に袴一枚、十時すぎから足が痛くて足が痛くて、十一時すぎる頃からは、もう何を言われても耳までには入りません。泣き顔をしながら足の痛さをこらえていましたが、師匠は熱心に教えてくれる。私は全く足の痛さで、せっかくの教えも耳に入らない。十一時半頃、師匠の前に頭を下げて「さっきから足が痛くてどうにもならないので御勘弁下さい」と平身低頭したことがあります。その時のお稽古が、伊賀越の八ッ目「岡崎」、その時の本は今も宝もののようにしてしまってあります。

土佐広師の師匠・土佐太夫師の相三味線を永くおつとめになった吉兵衛師の芸風、うまさというものは、今も耳について残っている、実に大したものでございました。

「土佐太夫さんが座り直して座ったまま死んだという。ワシも座ったまま死ぬよ」と常にそう言い続けた吉兵衛師は、土佐太夫師歿の翌年、一日中お稽古をして疲れて、夜八時頃に按摩をとっていたら突然「起してくれ、おはまさん」とおつきの女中に起して貰って座り直して、そのままガックリと息をひきとられたという。名人の死というものは実に豪気なものであります。私は、当時、木も得られない程の戦争中（昭和十七年）、一寸二分の厚い檜のお棺を作って師匠のお体をお納めしました。生きておいでるような豪快なお顔、眠っているような御立派なお顔でございました。名人の死というものは、禅で悟りをひらいた名僧の死と同じこと、今でも目に残って焼きついております。

竹本播磨太夫師と竹本小清師のお噺

相談役　豊沢猿三郎

此の処、昔噺を書きませんので、数多い方から余り怠けるなとお叱りでしたが、今度編集部から是非書いてくれ、また皆様の御希望もありますので思い直して書き始めました。

大正の初め、播磨太夫師が小清師を訪ね、「なあ、おはるさん、わし所へ一寸筋のえゝ娘が来てるのやけど、わしも年やさかい、あんたの弟子にしてロ語りにでもして下さらんか」と兄の様に思って居る人の頼みに、小清師も快く引受けました。近頃の様に一週何回等となまぬるい稽古と違い、三百六十五日、一日の休みも無く二人の名匠稽古と、夜は寄席へ行き、弾き語りで簾内で語ります。一年に千九十五回の稽古と舞台、上達するのが当り前です。翌年播若と命名、ロ語りとなりました。

段々と昇進、八年後の大正十一年には、モタレ迄上りました。以前申しました様に、小清師の様な立派な座では、初ロ・ロ二・ロ三・四枚目・スケバ（切三）・モタレ（切前・真打候補者）・看板さん（真打）という格式があります。播若がモタレに上りました三月、播磨太夫師は病い篤く、小清師に「播若をあない立派にして呉れたは、あんたの力や。ほんまに有難う」と礼を言って亡くなられました。

其の翌年、三月二十三日、浜町・日本橋倶楽部で播磨会連中主催の追善会が行われました。お弟子の中の保々長平様が三千円を寄進されましたので、予想外の大会と成りました。其の頃の三味線の皮の張替は三円、只今は三萬円。三千円は如何に莫大な金額であったかです。会場隣りの精養軒を終日貸切、来賓は一日何度でも好みの料理を注文、和洋酒でのお供養、引き物として舞台用石持の着付に、紋染代・仕立代として金一円を添え、因会々員四百三十名全員へ、箱屋さん（床世話）に届けさせました。

其の夕刻、小清師は私の師匠に「わしは西洋料理よういかんよって、近所で食事して来ます。此の子借りて行きまっせ」と断って私を供に筋向いの鳥安（食通人の間に有名な関東一の合鴨の老舗）へ行きました。先客には柳原伯爵等も見え、小清師に挨拶をされていました。師匠は私に「今日の仏の眼の黒い内、播若の看板上げなんだのは、わしの一生の不覚やった」と悔んで居られました。其の夜、播若の看板を十月一日に上げる事が小清師の口から洩れたので噂は広がり、播磨・小清の弟子の旗上げとて、めったに戴けない魚河岸・兜町・米屋町と三大市場からの引幕、その他十張りの後幕、そして清一師の三味線、宮松亭の檜舞台、其の上、小清師が初日に出口上を付けると言う、女義としては金鵄勲章と旭日大授章を一度にいただいた様な名誉だったのです。ところが、何と言う天の災いでしょうか。九月一日の関東大震災です。石原町に住む播若は、家の前の被服廠へ逃げて一家全滅、すべてが夢となりました。小清師も何やかやですっかり気落ちしてお気の毒でした。

私も先年、折角の養子のお話も御辞退したお詫やらお慰めに、毎月赤坂の師匠へお目出度の御挨拶の帰り、小清師の許へ立ち寄り、故名人方の芸談を伺います。其のあと「神さんへ供えてあるおみき、降ろして頂きや」と申され、お昆布を噛み乍ら頂くのをにこにこしながら見ていられます。

昭和三年二月一日、例の通り芸談の時、国詞の初衛門の殺しの〳〵死にに出たかや　チリチリチレチ、チリチチテン。ツンへ乳の下より仲居が体一と廻ぐり……此の合の手が私には弾き方が判りませんので師匠に伺いました。師匠は「稽古場から三味線持って来て弾いて見や」私、弾きました処、恐ろしいお顔になって「何や、気違い男が自動自転車（バイク）で崖から落ちた様な弾き方や。お前の師匠の猿之助はんはな、其の場の風景・人物・人情迄、一撥一撥からにじみ出てる程の名人やな

いか。お前は何故それを早う覚えんのや、阿呆な、三味線貸してみ」師匠が弾きました。まるで死神のついた仲居が人魂のように出て来る。初衛門の妬み・恨み・怒りの「ツン」其の強さ、血が迸る様で、私の心臓に突き立つ様な「ツン」でした。今でも耳に残ってます。十五・六回稽古戴いている内、段々に御気嫌も直り、例の通り「おみき戴きや」と成り、松前屋の佃煮を噛み乍ら御馳走に成りました。

突然思い出され「アノナ、七日の晩、六代目はんがわしの鰻谷聞きたい言やはるね。わしも六代目はんの様な芸の虫の名人は大好きや。一世一代の積りで語るで、おまはん来てんか」のお話でしたが、其の日、赤坂の師匠の仲人で、私の見合いの日なので、その由申し上げますと「それは目出度い事や。よいよい、清一に供して貰いまっさ」と喜こんで下さいました。之から以下は、清一師に伺ったお話です。

芝の菊五郎様邸の舞台前には、六代目様始め御一門が列座なさると幕が開きました。全段一時間余り過ぎ、段切りの〆心そぞろに鳴る鐘は、四ツ橋チチン……弾き終ると撥を右側に、三味線を静かに前に置き平伏なさいました。余り平伏が長いので清一師が御注意申し上げました時は、既に息絶えて居られました。夜中に新宿の私宅にお電話を頂き、師匠の枕元へ飛び込み私は叫びました「おっ母さん」と。後は何も申せません。枕頭の清一師は「それでよいのです。其の一言でお師匠様は喜んであの世へ往らっしゃいましょう」と言われました。

翌日の新聞は大ニュースです。都新聞（東京新聞）なぞ全紙の七分通りを埋め、一号活字で〝女義界の巨星墜つ〟そして芸能評論家の大先生方の追悼記事で一杯でした。之を機と言う訳ではないでしょうが、東京の義太夫界は消沈しました。私、小清師匠への追善の心持で、大阪の人形大幹部・小兵吉・政亀・徳三郎・紋太郎・扇太郎氏の他、二十名様を毎月十日間お招きして東京人形座を設立、一年間連続興行致し義太夫界をいさゝか復活させました。無論、大先輩のお師匠様方のお力添えが有ったからと感謝致しております。

お噺はこのくらいにして、若い方で浄瑠璃が上達したい方が万一有ったら、小清師のお墓参りも精神上無駄ではないでしょう。お寺は、台東区浅草栄久町仙蔵寺です。地下鉄稲荷町の交番で聞いて下さい。戒名は、春暁院聲楽小清大姉（佐久間ハル）です。このたびはお噺が大変長くなりまして誠にお退屈様でございました。

会員の便り

本牧亭で、是非車人形の「葛の葉」を出して下さい。先月国立小劇場での芸団協主催公演〝変身〟Aブロに行って来ました。八王子車人形西川古柳一座「葛の葉」に深く感動しました。今迄車人形のレパートリーを相当見ましたが葛の葉は初めて。もともと説教節で上演されたものを竹本綾太夫さんが義太夫節の曲としての復活上演とか。歌舞伎で見ている「芦屋道満大内鑑」の葛の葉「子別れの段」でなくてその後に続く場面である「乱菊の段」と「信田の森二度目の子別れの段」。白狐が保名親子との縁を絶切る為、恐ろしい白狐の本性を露して森の中へ消えて行く、各役の車人形に魂が入った如く大変素晴しいものでした。舞台装置、照明そして何よりも舞台を盛り上げたのが当日の太夫、竹本綾一さんの哀切をこめた語りに負うところ大であると感じました。〝伝え聞く安部の童子が母上も、丁度わが身と同じこと。一人の若を残し置き、信田の古巣に帰りしとや〟柳の精お柳の言葉を頭の中で重ねていました。アンサンブルのよさにより成功していました。

そこで車人形〝葛の葉〟を本牧亭の月例公演で是非再演して下さるよう希望します。もし舞台の構造上無理ならば、義太夫だけでももう一度じっくり聴いてみたいものと思います。新作・復活ものの義太夫を出すことに賛成です。以上お願いまで。

（河北生・本牧亭女義ファン）

協会の動き

昭和58年12月より
昭和59年6月まで

〔昭和五十八年〕

12月5日　教師のための義太夫講習会（文化庁助成）　京都府立文化芸術会館

5日　邦楽連合会　於長唄協会

12月7日　東京都教育委員会による業務及び財産の状況に関する検査行われる。

7日　芸能人年金推進懇談会　於芸団協

12月12日　公演部会　於新小松

12月14日　定款一部変更申請書提出

12月15日　芸団協芸能人のつどい　於日本青年館

12月20日　第13回心身障害児のための特別公演（9頁参照）　於本牧亭

12月21日　昭和58年お名残公演　於本牧亭

12月22日　定款一部変更認可（11頁参照）

〔昭和五十九年〕

1月7日　東京都教育委員会により、法人の管理及び運営の事務及び事業は適正に処理されていると認められた。

1月14日　新春懇親会　於蓬莱閣

1月20・21日　義太夫協会公演会〝赤坂並木〟14年ぶりに演奏　於本牧亭

2月3日　〝女義の今昔〟邦楽百選にて放映

2月5日　娘義太夫精進の会（鈴木一光氏助成）　於本牧亭

2月6日　定例理事会　於本牧亭

2月15日　義太夫三百年企画委員会　於宮城道雄記念館

2月20日　会員名簿別冊発行

2月20・21日　伝承者研修発表会（義太夫節保存会主催・義太夫協会後援　文化庁助成）　於本牧亭

2月24日　普及部会　於リベーラ

2月25日　資料・記録部会　於幸純宅

2月28日　三百年委員会　於都民銀行会議室

3月4日　理事変更・定款変更登記完了届

3月8日　'84都民芸術フェスティバル　第14回邦楽演奏会　於第一生命ホール

3月12日　三百年委員会　於都民銀行会議室

3月13・14日　三百年委員会　於はる乃

3月16日　芸団協主催公演〝変身〟に素八他出演　於国立劇場

3月20・21日　第7期竹本研修生発表会　於国立劇場

3月26日　義太夫協会公演会　竹本友由貴、東京に初おめみえ。豊澤仙雛、芸団協助成新人奨励賞受賞　於本牧亭

3月29日　義太夫教室第36期生、名誉会学生大会に参加　於東横ホール

3月29日　昭和58年度民間芸術等振興費補助金（青少年等芸術普及）実績報告書・同59年度事業計画書提出

3月31日　58年度補助金額の確定通知

〔昭和五十九年度〕

4月6日　芸団協第10回芸能功労者表彰式　野澤吉平が受賞　於東京会館

4月10日　普及部会　於新小松

4月12日　昭和59年度補助事業についてヒアリング　於文化庁会議室

4月20日　芸団協著作権面白ゼミナール'84　於新橋第一ホテル

4月20・21日　義太夫協会公演会　於本牧亭

4月25日　公演部会　於新小松

5月9日　昭和59年度事業計画書提出

5月16日　経理部会　於弥乃太夫宅

5月20・21日　義太夫協会公演会　20日は、野澤吉平芸団協芸能功労賞受賞を祝う会　於本牧亭

5月25日　定例理事会　於新小松

5月27日　娘義太夫精進の会　於本牧亭

6月1日　義太夫教室第37期開講　於銀座三丁目東町会事務所

6月5日　経理部会　於弥乃太夫宅

6月8日　昭和60年度民間芸術等振興費補助事業計画書提出　於事務局

6月9日　資料部会　於芸団協会議室

6月19日　芸団協邦楽ジャンル懇談会　於東京会館

6月20日　芸団協総会　於東京会館

20日　義太夫協会会報第31号発行

（投稿）
ニュー・メディア時代に即応

女流義太夫百花繚乱を競う

―素八・素丸親子会のことなど―

吉田哲夫

雪に明け、雪に暮れた今年の春は、四月中旬になって漸く桜も綻びる季節となった。

一九八四年は、女義の各方面での活躍が顕著で、上昇気流にのった感がある。

先ず、正月早々の朝日新聞に〝娘義太夫入門します〟と義太夫教室出身の女子大生が鶴澤寛八師に弟子入りすることが大きく報道された。続いて、二月三日、ＮＨＫテレビ〝邦楽百選〟で全国に放映された「女流義太夫の今昔」これは昨年国立劇場で好評を博した公演のアンコール・アワーで、急造ドースル連となってスタジオに馳せ参じた諸兄姉たちも楽しい一刻をすごしたのである。

二月十九日〝義太夫三味線しょって立つ、並はずれた才能・努力〟と大見出しで、読売新聞に新人・野澤錦鈴の記事がのせられた反響もあって、二月の本牧亭が連夜若き観客を動員したことは、喜ばしい現象であった。話題の錦鈴は「本朝廿四孝　十種香から奥庭狐火」を評判通りの腕前で立派に演奏、満席の観客から喝采をあびた。その上、翌二十二日ＴＢＳテレビの早朝番組が楽屋での駒之助師の談話や客席のスナップ等当夜の模様を放映したことは、ニューメディア時代にふさわしいことと大変意義深い印象をうけた。

三月公演では、義太夫教室生徒として進境著しかった豊澤仙雛が芸団協助成新人奨励賞を受賞、お祝として竹本春華師匠の語りで、「生写朝顔話　宿屋」を見事に演奏した。偶々大阪から若冠十六歳という若い太夫の初おめみえもあって、新人の勉強ぶりが頼もしく思えた。

少し前後するが、二月新派公演〝女橋〟には、竹本朝重・豊澤仙雛が三番叟を演奏して演劇方面でも活躍した。それに引続き、国立小劇場で三月十三・十四両日行われた古典芸能公演では、竹本素八・豊澤幸純が岡山県の伝承芸能である面芝居「太功記」に、竹本綾一・豊澤幸治・仙雛が八王子車人形「葛の葉」に各々出演した。これも後日放映されるというが、女義連が遅咲きの桜にまけず、百花繚乱の芸を競演していることに大いに期待するものである。

最後になったがここに記述しておきたいのは、三月十二日、本牧亭での〝素八・素丸親子会〟の成果である。開催前に送られた案内状に曰ク……一門の素丸が義太夫節の修業を始めて十年、芸の厳しさも身にしみ大切な時機だから一層勉強のため師弟ともども芸の鍛練に開く親子勉強会であるとの謙虚な文面に好感をもった。当日の観客は、本牧亭本公演を上廻るほどの超満員となり、終始なごやかな雰囲気の中で文字通り真摯な舞台が展開された。素丸は、昨春若手四人で主宰した『まゆの会』では師匠譲りの「太十」を豪放に語り進境を示したが、今回は「生写朝顔話　宿屋より大井川」（絃竹澤團生）可憐な深雪を精彩に〜露のひぬ間の朝顔を……哀切極まる琴唄から品よくまとめ、聞かせどころの……ひれふる山の悲しみも――余り絶唱にならずによかったが、ただ岩代をもっと憎々しげに表現して欲しかった。しかし、十年の精進を十分発揮した出来栄えであった。

中入りに、吉田後援会長の司会により吉川英史会長、竹本土佐広師匠らの激励の言葉や、朝重・駒之助両副会長揃っての挨拶等あって、更にアト・ホームな気分が浸透した中で、竹本素八・豊澤幸純の「菅原伝授手習鑑　寺子屋」流石にベテランらしく重厚な語り口で、土佐広名人とは別の感覚の寺子屋と、感激した。

こうした催しが続々と企画され、二十一世紀に向って義太夫界の前進に『喝』を入れ、ニュー・メディアに即応したＰＲを集中、大いに邦楽ファンを堪能させてくれることを希望するものである。〈一九八四・四・十二記〉

（ジャーナリスト・賛助会員）

（お断り）四月中旬の御投稿でしたが、掲載のおくれたこと、又、紙面の都合で大幅に割愛させて頂いたことをお詫び致します。

編集部

（投稿）

越道一門会を聴く

鰻谷　鴻

長かった冬、桜の花が漸く咲き始めた四月十三日夜、新宿文化センター小ホールに「竹本越道一門会」を聴きに行った。義太夫の魅力にとりつかれ、あちらこちらと聴きに歩いている。芸評をする程の実力も権利もないけれど、当日の感想やら平素思っていることなど思いつくまゝ一筆啓上。文中敬称略御免。

始めが「五條橋」でプロ入り四年余の越恵の牛若丸と一年チョットの越君の弁慶。（三味線幸純・仙雛）晴れの舞台に堅くなっていたようだが、懸命に語り好感が持てた。初舞台以来聴いている両人、経験を積む毎に育っていることがわかり楽しい。「初心忘れるべからず。一にも稽古、二にも稽古」何十年先はともかく、当面はすぐ上の先輩の後に続くよう一層の精進を望む。ゴクロウサン。

口上の前に〝衣裳を変える間〟とことわって立川談生演ずる落語（越道門弟の一人と自己紹介）。義太夫の会で途中に小唄や、他の異質のものが入る時がある。演者は本格的なものであっても、会の流れがダレるので平素からあまり感心していない。むしろ幕間が長ければ、その間久し振りに会う人達と歓談ができる。

口上は師匠を中心に一門四人が肩衣をつけて平伏する歌舞伎風のものであった。越道挨拶に「自己に謙虚であれば、その姿勢はおのずと芸をもみがきます。四人の弟子達各々がその自覚の上に、如何に正しく芸を伝承して行けるのか」「越若越孝の両人は芸道に入って十年余。この頃になって漸く義太夫節のむつかしさがわかった時」と門弟に対して慈愛に充ちた言葉があった。

越若・越孝―過ぎた十年は、一心に修業を積んで、さぞあっと云う間に過ぎ去った事だろう。今や芸歴相応の実力をつけ、その将来性は楽しみだ。さて今後の十年こそ両人にとっての正念場であろう。後から次の世代が追って来る。会社で云えば係長クラス。自分達の置かれた立場を広い視野から自覚して、今後共精進してもらいたいものと、大いに期待するものである。師に促された越若、極度の緊張からか平素のはつらつさがなく小声ではあったが謙虚な口上は好感が持てた。ただしこの口上、準備時間をかけた程のことはなくいつもの本牧亭のように、リラックスした姿での挨拶で十分だ。

この後が〝本番〟の「太功記」まず越孝の「夕顔棚の段」（絃仙雛）端場ながら懸命に語り、しんみりと聴かせた。越孝は一昨年NHKテレビ「ハイカラさん」昨年の国立劇場等に、娘義太夫当時の扮装で出演したが、この人には、私などが生れる前の時代の娘義太夫の雰囲気を想像させるものがある。その容姿、語り口から発散する良い意味での愛嬌と色気を持つ貴重な存在であろう。

続いて会主越道の「尼ケ崎の段」前。（絃重輝）いつもながら丁寧に語る。奥が越若（絃幸純）口上の時とは違い持てる力を遺憾なく発揮し、堂々と語り終えた。

越若・越孝両人が違った芸風を持ち、それぞれ得意とする方向へ進みつゝあることは、頼もしい。身近にライバルがいるということは、当人にとっても一門にとっても幸せなことである。二人を対照的に聴くことができたことは、この日の収獲であった。

蛇足―太功記の背景、装置は不要ではないか。一段の中筋は刻々と進み悲嘆の場に、フト目に入るのどかな風景。どうも意味がわからずじまいであった。もう大分前のことになるが、本牧亭の師走公演でのこと。七段目一力茶屋の背景が華かな効果をあげていたのを一寸思い出した。

会場には約二百人位の聴衆、若い女性の姿が多く華やいだ雰囲気であった。幕間に、司会のNHK尾島勝敏アナが取材のインタビューをしていたが、義太夫ははじめてという層も居たようだ。越道の意欲、一門のデモンストレーションを感じた。

各師匠方のリサイタル、勉強会等がそれぞれ多くの聴衆を集めていることは、ひいては

義太夫節の普及宣伝につながること。その努力に敬服する。今後は、これらの会や、国立その他の団体が主催する会に聴きに来る重・複し・ない・聴・衆・を義太夫協会の主催公演に如何に一人でも多く吸収することができるか。協会の役員としての師匠方はじめ〝御連中〟〝ひいき〟〝ファン〟である賛助会員等にとっての課題であり、それができた時に、初めて協会が目的とする義太夫節の継承と、更に今後の発展があるものと考えながら家路についた。

第13回　心身障害児のための特別公演

収支決算報告

＜収入の部＞

会場募金箱（20・21日）	40,650円
当日入場料	57,100円
出演者有志	10,000円
協会補助	10,620円
協会扱御寄附	277,000円
＜内　訳＞	
豊澤　仙広様	50,000円
新小松従業員御一同様	33,000円
新橋組合様	20,000円
松前　重義様	20,000円
坂本　朝一様	13,000円
妣田　圭子様	13,000円
松尾　武市様	13,000円
内野　アキ子様	10,000円
河野　国声様	10,000円
菅　邦夫様	10,000円
鈴木　一光様	10,000円
富士港運様	10,000円
横山　敏雄様	10,000円
渡辺　兼佐様	10,000円
和田　博様	10,000円
竹本　扇太夫様	5,000円
竹本素八を聴く会様	5,000円
寺中　作雄様	5,000円
中村　初波奈様	5,000円
宮脇　雪むら	5,000円
鶴澤　重造様	3,000円
石川　泰三様	2,000円
金原　ふじ様	2,000円
桜井　喜美様	1,000円
鶴澤　重輝様	1,000円
豊澤　新兆様	1,000円
収入合計	395,370円

＜支出の部＞

心身障害児のための寄附金	200,000円
本牧亭席料他諸掛	75,000円
通信費	34,930円
交通費	9,940円
床世話・荷上他	27,500円
総稽古諸経費	10,500円
謝礼・祝儀他	36,000円
諸雑費	1,500円
支出合計	395,370円
差引残	0円

＊会員各位の御協力に心から御礼申し上げます。
＊今回も、プログラム・切符等の印刷一切は、協会相談役の高野俊雄氏がおひきうけ下さいました。どうも有難うございました。

竹本梶花さんについて
御存知の方はいらっしゃいませんか

明治20年、亥年の生れ、7歳で竹本梶之助に入門、9歳、浅草で初舞台。14歳で梶花を襲名。晩年は埼玉県深谷で稽古をされた由。50歳位で亡くなった方です。

梶花さんの姪御さんが、どんな些細なことでも知りたいと尋ねておいでです。

竹本梶花さんの高座

女義隆盛の祖・竹本東玉師
―晩年・墓所等判明―

竹本東玉師の孫にあたるという大阪在住の加藤蟻笑氏が、NHKの邦楽百選〝女義の今昔〟を御覧になり、東玉師の写真を入手できないかとのお問合せ、早速複写してさし上げましたが、折り返し、御子息の加藤復雄氏から、東玉師の晩年のこと等を詳しく御教示いただきました。大変貴重な資料となります、どうも有難うございました。

素顔の重之助師匠

―徒然と思い出すこと―

竹本重光

重之助お師匠さんが亡くなられて、もうすぐ一周忌を迎えようとしております。お嫁さんに当られるチヅさん、お孫さんの以志子さんお二人の手厚い看護のもとで、お幸せな最後であられたと存じます。思い返せば、昭和五十四年六月に初めてお師匠さんのお宅へ伺ってから早五年の歳月が過ぎようとしております。私の家からお師匠さんのお宅まで歩いて五分もかからなかったものですから、毎日お稽古に伺っておりました。そうこうしているうちに本牧亭へ出演させていただくようになって今日に至ります。

お師匠さんは物静かで、無口な方でしたが、慣れ親しんでゆくに従ってぽつりぽつりと、御自分のことをお話しになりました。先代の重之助師匠はたいへん厳しい方で、子供のころは毎日泣いていた、とおっしゃっていました。ご自分の家を出る前に「今日は、お師匠さんのご機嫌がよいようにと、神様にお祈りして出たのよ」と。ある時、玄関にどなたかいらしていて、あわてて置いてあった下駄を突っ掛けて出たら、その下駄が先代の下駄で〝師匠の下駄を足にかけるとは何事ぞ〟とのことで、その日一日、下駄を頭の上へ乗せられて、玄関で正座させられたとのこと。どうして私が、こんな思いまでして、義太夫をやらなければならないのかと思ったと、おっしゃっていました。

毎朝六時までに、一分でも遅れて師匠のお宅へ入ったらその日一日は、稽古を付けてもらえなかったとのこと。先代のお師匠さんのご主人がやさしい方で、遅れそうになると心配して人力車を寄越してくれたと、おっしゃっていました。因に、先代のご主人は慶応大学の教授であられたそうです。また、お師匠さんのご主人も慶応ボーイです。ある時私が、ご主人の写真を拝見して「お師匠さんのご主人て、ハンサムだったんですねぇ」と申しますと、「そうなの。なかなか良い男だったのよ」、お師匠さんが十九歳の時、ファンであられたご主人と結婚なさったとのこと、お師匠さんは一人っ子で、ちょっと反対されたとおっしゃっていました。ご主人は慶応大学を卒業され、逓信省のお役人だったそうです。結婚してみると、ご主人の一ヶ月分のお給料を、お師匠さんが一晩か二晩で稼いでしまったとのこと。ご主人のお給料がばからしくてばからしくて、たまたま知り合いに、事業をやらないかと持ち掛けてくれる人があって、ご主人にすすめてしまったとのこと。ところがドッコイ、ご主人はいわゆる慶応ボーイ、ええとこのおぼっちゃんで、商売には全然むかず、次から次へと失敗し、お師匠さんが義太夫で稼がざるをえなかったこと。人のいいご主人は、他人の証文に判を付いて、借金を抱え込んだりしたそうです。私の家の祖父も亡くなりましたが、よく「お宅のおじいちゃまとおばあちゃまどう？」とお聞きになり、私が「毎日二人で大声はり上げて喧嘩しています」と申しますと、ケラケラ笑って、「私もおじいさんが生きている時は、しょっちゅう喧嘩していたわ。それがいいのよ。できなくなったら寂しいものよ」とおっしゃって、ハンサムなご主人を想い出していられたようです。

また、お師匠さんは、なかなかの健啖家でもありました。さつまいもも好物の一つで、よく蒸したさつまいもが、ちゃぶ台の上にのっていました。ある日私が伺った時、ちょうどさつまいもを召し上っていらして、「お師匠さん、おいもがお好きですね」と申しますと、昔、竹久夢二に、文芸クラブという雑誌に、今でいうイラストレーションのようなものを描かれたことがあるとおっしゃっていました。題名は「いも娘」、見台の上に湯気が立ったおいもがのっていて、お師匠さんが語っているところだそうです。また、娘義太夫の花形だったお師匠さんは、今でいうブロマイド、絵ハガキが出廻っていたそうです。

お師匠さんは六人のお子さんに恵まれましたが、チヅさんのご主人である息子さんは戦死、その他四人のお子さんに先立たれ、一昨々年には、ご長男が他界され、一人の娘さんを残すだけになってしまわれました。また、お孫さんの以志子さんのご主人がお亡くなりになった時は、たいへん嘆かれて、代われるものなら私が代りたかったと、おっしゃっておられました。「私は義太夫が好きだから止められなかった。一度（ご主人に）家庭を取るか、義太夫を取るかといわれて、家を出たことがあるのよ」といわれたことがあります。おしゃれだったお師匠さん。お稽古の時は、きれいに髪を結い上げ、きちんと着物をお召しになって、お稽古をされました。辛かった修業時代、ご結婚なさってからのご苦労、お子さんの死、数々の困難に立ち向われて生きぬいた明治女の心意気を垣間見、私のこれからの人生に、すてきな贈り物をいただいたような思いでございます。

七月二十一日の本牧亭重之助追悼公演には、たくさんの皆様にご来場いただき、ご一諸に亡き重之助を偲びたいと存じます。どうか、よろしくお願いいたします。

そろいの意匠の見台

本牧亭七月公演にて供覧

―新橋芸妓組合より寄贈さる―

このほど、古曲会の竹内道敬氏のお力添えにより、新橋芸妓組合から素晴しい細工の、しかも揃いの意匠の見台を四台御寄贈いただきました。7月21日〝重之助師を偲ぶ会〟から使わせていただくことになりました。品の良い最高級の見台が並んだ舞台は、さぞ壮観でしょう。

【寄　贈】

豊澤時若氏　アガリ糸　多数
竹本土佐恵氏　駒たたき　一ヶ
高野俊雄氏　会員名簿別冊　八百部
豊澤猿三郎氏　忠臣蔵プログラム・切符印刷一式
　大日本義太夫因会顔附（大正12年）
鶴澤政一郎氏　アガリ糸　多数
和田　博氏　お伽草　かちかち山の段
　回向院義太夫関係墓碑供養碑調書
　三府浄瑠璃太夫三絃人形操見競鑑（明治20年版）コピー　一部
　東京娘義太夫写真鑑（第一輯）（大正３年版）コピー　一部
河野国声氏　複写機　一台
新橋芸妓組合様　見台　四台
及川尊雄氏　コマ　二ヶ
（他にバチ・コマを格安で頒けて頂きました）
平賀広幸氏御遺族様　床本・五行本　多数

定款一部変更

―変更部分

（事務所）この法人は、事務所を東京都中央区銀座六丁目十八番二号　新橋演舞場B2におく。

（事業）各種公演会の開催

ア、正会員の定期公演会　イ、中学生および高校生のための学校巡演

（賛助会員・特別会員の定期公演会、女流義太夫の定期公演会を削除）

（会員の種別）

推薦会員　この法人の事業目的に賛同し、協力する研究者のうちから、理事会の議決をもって推薦する者で、会費年額五〇〇〇円を納める者

正会員・推薦会員を民法上の社員とする。（昭和58年12月22日認可）

○○○○○○○○○○○○

準賛助会員の規定が変りました

若い方、義太夫教室出身の方のための準賛助会員は、59年度から三年間に限られることになりました。三年以上経過の場合は、賛助会員又は特別会員に御変更下さいますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。

お見舞　協会の常任相談役・大日本素義会の会長、松尾武市氏は5月22日、女子医大で胃潰瘍の手術をうけましたが、経過は良好で、早くも6月10日には退院されました。一日も早い御全快をお祈りいたします。

******** 新入会員御紹介 ********

[redacted]

******** 移転・住居表示変更 ********

[redacted]

義太夫節三百年
―一連の企画―

7月20日　〝教師のための講習会〟
講演「義太夫と近松の世界」
乙女文楽・ひとみ座出演

9月21日　初代義太夫の祥月命日に因んで、
吉川会長が肩衣をつけて語る(?)
「初代義太夫物語」（仮題）

10月10日　「義太夫祖先祭」初代はじめ先人
の供養を―　於両国回向院

11月20日　〝教師のための講習会〟
講演「義太夫節三百年を迎えて」
（仮題）八王子車人形出演予定

11月27日　〝義太夫節三百年記念の会〟
於日本橋三越劇場

今から御予定にお含め頂ければ幸いです。

編集後記

このところ、新聞・テレビ等で義太夫がとりあげられることが多いのですが、9頁の東玉師の例、また〝花の昇菊・昇之助〟とうたわれた昇之助師縁りの方からのお電話、駒之助副会長の毎日新聞掲載の翌日には、旧知の方から連絡先を教えて――等々、マスコミの反響の多様さには驚ろかされます。

31号は発行が遅れ、せっかく頂いた投稿の時期がずれてしまい申し訳ありませんでした。次号は、義太夫節三百年に因んだ内容になる予定です。どうぞお楽しみに。